

## B-5

スポーツイベントにおける化学テロ想定での訓練～佐賀県国民保護共同実動訓練、及び病院受け入れ訓練を通して

佐賀県医療センター好生館 災害対策室・救急科  
○小山敬  
末安正洋、龍知歩、朝日美穂、吉富有哉、甘利香織、松本康、岩村高志

化学テロは救急医にとっても比較的馴染みの薄い災害であるが、国民保護法に基づいた消防、警察、自衛隊などを交えた総合訓練を佐賀県として5月30日に実施した。好生館としては他の医療機関とともに訓練準備段階からの関わりを行い、プレイヤー及びコントローラーの訓練参加を行った。佐賀県では第一回の国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会を秋に控えており、この種のイベントに関連した特殊災害を想定しておくことは必要である。一方この訓練は災害発生地点への病院外医療チーム派遣を想定しており、病院での受け入れ訓練は同日実施されなかったため、別途好生館での受け入れ訓練を9月上旬に実施する予定である。これら2つの訓練についての報告と、訓練を通して得られた課題、今後の佐賀県における対応などを検討したい。

## B-6

当院搬送脳卒中症例でのLVO Scale有用性の検証

サンテ溝上病院 脳卒中センター  
○尤郁偉  
溝上泰一郎、上床武史、田中淳

### 【目的】

当施設は脳卒中を中心とした地域救急医療を支えるべく、開設当初から脳卒中ケアミックス病院として急性期からリハビリまでシームレスな医療を展開し、2023年度は10例の機械的血栓回収療法、15例のtPA投与を行なった。血栓回収施設への直接搬送を考慮するため、病院前の段階で救急隊が主幹動脈閉塞(LVO)の予測を可能とする指標が脳卒中学会の主導で提案されている。本発表は当院搬送例の分析を行いLVO Scaleの有用性を検証することを目的とした。

### 【方法】

2023年4月1日から2024年3月31日までの570例の救急搬送例のうち、虚血性脳卒中と診断された86例について、救急活動記録票の観察所見をもとに救急隊出動時のLVO Scaleを算出し、その有用性を検討した。

### 【結果】

虚血性脳卒中と診断された86症例で、LVO Scaleが3項目以上該当の場合は71%の症例で、4項目以上では100%の症例で血栓回収が実施されていた。LVO Scaleが1項目以下で主幹動脈を有し血栓回収が必要であった割合は5%のみであった。

### 【結論】

LVO Scaleが3項目以上の場合、血栓回収療法に至る可能性が高く有用性が示された。一方で、今回の検討期間中、脳卒中と診断された110例中で、病院搬送前に救急隊によりLVO Scaleを算出していた症例は5例(4.6%)にとどまり、LVO Scaleの浸透をより深める必要があると考えられた。

## B-7

ドクターヘリにおける救命救急士との協働で得られた効果～フレイルチェストをきたした重症患者の一例～

地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館  
救命救急センター  
○馬渡修平  
内田陽一郎、北川誠也、寺田恭巴子

### 【目的】

令和3年に成立した救急救命士法の改正に伴い、当館では令和6年4月から病院救命士(以下、救命士)がドクターヘリに同乗し、令和6年6月までに16件の病院前救護活動を行った。今回、フレイルチェストをきたした重症外傷患者に対し、救命士と病院前救護活動を協働して迅速な対応に至ることができたため報告する。

### 【症例】

症例は40歳代男性、工場内で倒れ気胸疑いがあり、医療支援要請にて医師・看護師・救急士がドクターヘリに同乗し対応した。患者は既往歴がなく、接触時に右胸部にフレイルチェストを認めた。

### 【経過】

看護師は診療の補助と看護ケアを行い、救命士が情報収集、救護活動記録、資器材管理を行った。救命士と病院前救護活動を協働した事で、看護師は患者に付き添い疼痛の評価、精神的ケア等に専念することができた。更に疼痛増悪による呼吸状態悪化を認め、迅速な鎮痛剤投与を行った。

### 【考察】

ドクターヘリは医療者を救急現場にいち早く投入することで、迅速な初期治療の提供を目的としている。その中で看護師は診療の補助、看護ケア、情報収集、救護活動記録、資器材管理など多くの役割を担う。社会的に多職種連携・協働の推進が求められる中で、救命士との協働は、看護師として専門性を発揮できる態勢となった。今後は気道確保や救急救命処置等の協働を視野に入れてマニュアルを整備し、病院前救護活動の向上を目指したい。

## B-8

夜勤帯での胃瘻カテーテル事故抜去の一例

社会医療法人 謙仁会 山元記念病院 看護部<sup>1)</sup>  
社会医療法人 謙仁会 山元記念病院 診療部<sup>2)</sup>  
○中村恭平<sup>1)</sup>  
山元謙太郎<sup>2)</sup>、松尾和雅<sup>2)</sup>、山口由美<sup>1)</sup>、多久島圭子<sup>1)</sup>、川内ひとみ<sup>1)</sup>、小川健一<sup>2)</sup>

### 【はじめに】

当院は、看護師特定行為の指定研修機関である。特定行為件数は年々増加しており、医師のタスク・シフトシェアに貢献している。胃瘻に関するトラブルで遭遇するものに事故抜去がある。当院における2000～2023年度の勤務帯別の胃瘻事故抜去の件数は、日勤帯6件、準夜帯6件、深夜帯7件であった。瘻孔は、わずか数時間で縮小し早ければ半日～24時間で閉鎖するといわれているため速やかな対応が必要である。今回、看護師特定行為研修修了者が夜勤帯に胃瘻事故抜去の一例を経験したため報告する。

### 【症例】

80歳代 女性 要介護5 誤嚥性肺炎 胃瘻造設術後約1年  
準夜帯に看護師Aが胃瘻カテーテルより白湯を投与。約1時間後に訪室し、胃瘻カテーテル事故抜去を発見。夜勤管理看護師Bより勤務中の看護師特定行為研修修了者に相談。瘻孔閉鎖の可能性と再造設は患者負担が大きいと判断し消化器外科医に報告、尿道カテーテルで瘻孔確保を行なった。

### 【考察】

胃瘻カテーテル事故抜去は専門医不在の夜間帯に多く発生しているため、病棟における看護師特定行為研修修了者の役割や期待は大きい。また、特定行為実践のスムーズな体制作りと周囲のスタッフへの指導、教育も必要と考える。

### 【結語】

看護師特定行為研修修了者の需要は今後も高まっていくことが予想される。専門医不在時の病棟における看護師特定行為研修修了者の役割は大きいと考えられた。